



## 看護研究入門者への支援 —5年間の振り返りと学び—

武田 昭子

### I. はじめに

刈谷豊田総合病院(以下、当院)図書室では看護研究委員会の依頼により、2005年から看護研究基礎研修の中で図書室担当者による文献検索講義を実施しています。この5年間の経験を振り返り、実践事例に若干の考察を加えて報告いたします。

### II. 病院概要

当院は刈谷市とともにトヨタグループ7社(デンソー・豊田自動織機・アイシン精機・ジェイテクト・トヨタ車体・愛知製鋼・トヨタ紡織)が出資設立した、医療法人豊田会によって1963年に開院しました。2009年からは高浜市と豊田通商を加えた2市8社によって運営されており、2010年3月現在19診療科、病床数は621、職員数は約1,200名、うち看護師は607名です。

公立病院を持たない刈谷市において市民病院的な役割を担い、地域に根ざした医療サービスで社会に貢献することを基本理念としています。

### III. 図書室概要

図書室は診療棟4階に位置し、医局・看護部・研修医室・各外来からほどほどにアクセスのよい場所となっています。

職員専用の独立したスペースで24時間利用可能、面積は約240㎡、閲覧席数は16席、インターネット端末2台、電子カルテ端末12台、蔵書数は単行書約6,500冊、うち看護学書が約

1,700冊。2010年の年間購読雑誌数は和洋合わせて195誌、うち看護系雑誌は25誌。利用できる電子資料は、MD Consult、メディカルオンライン、医中誌Web、今日の診療イントラネット版、UpToDateのDVD版があります。

看護師の利用率は全職種の中で際立って高く、当室の2008年度の統計によれば、貸出利用者の78%、文献複写利用の17%が看護師となっています。

### IV. 看護研究との関わり

#### 1. 1年目(2005年)

病院図書館の司書として働き始めてようやく1年が過ぎた頃、当時の看護部副部長(図書委員会メンバー)から「看護研究の研修の中で、文献検索について講義をしてみないか」と声をかけられました。これまでは附属看護学校の教員に依頼していた部分ですが、せっかく院内に司書がいるのだから、人材活用しなければ!とのこと。当時、図書室業務に拡がり求めていた私にとっては願ってもないチャンスでした。自信はなかったけれど、できることを精一杯やります、早速これから勉強します、ありがとうございます!と即決で引き受けました。

後日、研修担当者(当時、看護部教育委員会)から講師依頼状とプログラムが届きました。それによると参加者は32名、内訳は卒後3年目研修者29名と希望者4名。研修目的は「看護実践・看護研究における文献活用の重要性を理解することで、科学的根拠に基づいた問題解決能力を育成する」、研修目標は「①看護研究論文を読むことを通して分析的・批判的思考の能力を

養うことができる ②看護における文献検索の重要性がわかり、実施することができる」とありました。その中で私が担当する部分は ①文献検索の方法 ②医学中央雑誌 Web 版の実際 ③図書室の活用方法 ということ、①②に30分の講義を、③は2組に分かれて図書室ツアーを行うことにしました。

まず準備のために、図書室と看護部とのかかわりや、利用者教育について書かれた文献を集めて読み、それらを参考にして講義のイメージを膨らませながら資料を作成しました。当日は自作の「医中誌 Web 検索マニュアル」と、配置図や分類の見方などを掲載した「図書室利用の手引き」、「文献複写申込マニュアル」を配布。医中誌 Web の画面をスクリーンに映し、実際に検索をしながら各所を説明しました。その後休憩をはさんで図書室に場所を移し、室内を案内しながら利用方法や文献複写申込用紙の書き方などを説明しました。

当時残した記録を見ると、反省の言葉ばかりが残っています。「看護研究」とはどういうものか、これから看護研究をはじめようという看護師が何を知りたいのか、全く予備知識のないまま取り組んでしまい、単純にデータベース検索の手順を説明するだけで終了してしまったのです。画面の操作方法については丁寧に説明したつもりでしたが、短い時間でたくさんの事柄を詰め込みすぎてしまい、受講者には明らかに理解できていない様子が見られました。基本的な操作の仕方を知ることはもちろん必要ですが、あれもこれも、と説明する必要があったらどうか。業務に追われて忙しくなかなか時間が取れない看護師が、自分の研究の役に立つ質の高い文献を入手するために、最低限必要な操作方法をわかりやすく説明することを優先してもよかつたのではないかと。次回もしチャンスがあるなら、これを課題にしようと思いました。

## 2. 2年目(2006年)

ありがたいことに翌年も使ってもらえることになりました。「去年と同じような感じで」と言

われましたが、去年のことを思い出すと反省点ばかりです。しかしその反省を元に、今回はまず「看護研究を知る」ところからはじめることにし、看護研究の入門書や初心者向けの特集記事などを読み、看護研究における文献検索の位置づけを学びました。また、東海目録会員メーリングリストでアドバイスをいただき、それを元に具体的な行動目標を設定し、参加者の理解度を把握するために事後アンケートも用意しました。今回の参加者は11名、対象者は卒後3年目に限定せず「看護研究に興味があり、深めたいテーマを持っている看護職で、師長の推薦を受けた者」となっており、研修目的は「臨床現場で研究を始めるための具体的な方法を習得し、研究計画書作成に取り組み、看護を科学的に追究する態度を身につける」、研修目標は「①看護研究の基本的な知識を理解する ②看護研究における文献検索の意義を理解する ③研究テーマを絞り込み、研究計画書を作成することができる ④研究計画書作成及びディスカッションをとおして分析的・批判的な視点で意見を述べるができる」。そして私は「図書室の活用方法」というタイトルで60分1コマをもらい、①医中誌 Web の使用方法 ②文献複写依頼の方法 を講義しました。具体的な内容としては、医中誌 Web の使用方法と検索結果の見方、検索結果から図書室で文献を探し出すこと、図書室にないものを複写申込するときの方法や注意事項、その他図書室にある二次資料やデータベース、参考図書を紹介。医中誌 Web では実際の画面で「褥瘡」と入力すると「褥瘡性潰瘍」と表示されるという実例を見ながらシソーラスの説明をし、例題として「ドライアイ」の検索結果から「ドライアイ」というノイズを除外し、カテゴリーを看護文献に絞り込むプロセスを見せました。

行動目標として、講義を聴いてくれた看護師さんにどうなってほしいのか、ということについて考えました。この頃、来室した看護師さんに助けを求められて個別に検索指導をすること

が増えていました。図書室に自分がいるときは協力してあげられるけれど、研究を始めるわけですから、やはり一人でも困らないように文献検索ができるようになってほしい。たくさんヒットしすぎたとき、逆に全然ヒットしないとき、自分で対処して満足いく検索結果を得られるようになってほしい。検索したら図書室にあるものは自分で見つけられるようになってほしい。図書室にないものも入手できる方法があることも知ってほしい。図書室の資料で看護研究に役立つもの、無料で使えるデータベースなども知っておいてほしい…それらの目標を達成するためには何をすればよいか。それを踏まえて資料作りをしました。今思うと欲張りすぎです。もっと整理するべきでした。事後アンケートでは「わかりやすかった」「これから使ってみよう」と比較的前向きな回答が多かったのですが、力を入れたシソーラスや絞り込みの部分が、「難しく、十分理解できなかった」との回答もありました。「説明はわかりやすかったけど、自分でやってみないとわからないので図書室に行ったときに教えてください!」ともありました。実際、これ以降、研修参加者がかわるがわるグループで訪れるなど、個別のフォローがしばらく続きました。

### 3. 3年目 (2007年)

看護研究委員会から「今年は少人数で演習形式の研修を行いたい」と連絡がありました。6月に前期・11月に後期と2回に分けて4名ずつです。研修目的・目標は前年同様、前期・後期とも60分1コマの時間をもらい、少人数の演習形式ということで図書室を会場とし、検索用端末を2台用意。資料は前年のものに手を加え、文章はより平易な表現に改めました。口頭での説明は少なくし、前半は画面を操作しながら検索例を見せ、残りの時間をできるだけ多く演習に当てました。検索の演習に時間をたっぷり使い、製本書架を探して実際に文献をコピーしたり、CiNiiからフルテキストを入手した人もあり、参加者全員が2~3文献ずつ入手するところまで

できたのは大きな成果でした。少人数ということで比較的フレンドリーに進行でき、演習形式の効果は絶大。前期・後期ともにより手応えがあり、3年目にしてようやく地固めができてきたように思いました。

### 4. 4年目 (2008年)

前年に引き続き、看護研究委員会から「今年も演習形式で」とリクエストがありました。ただし今回は日程の都合上、前期・後期に分けず1回で行うとのこと。連絡を受けた時点で参加人数は不明でしたが、時間は60分1コマと決まっていました。

この時期、当室には大きな変化があり、前回までの講義内容に追加したい点が2つありました。一つはメディカルオンラインの導入により、医中誌 Web からのリンクについて説明が必要であったこと。もう一つは、附属看護学校の閉校に伴い蔵書の移譲を受けました。そのため、看護系の資料が1,000冊以上増えたので、OPACでの探し方など、図書の利用方法について説明が必要だと考えました。

研修2日前に「参加人数は10名」との連絡があり、予想以上の人数にあわててしまいました。人数は昨年1回分の倍以上、しかし時間は今までどおりの60分。そして使える端末は2台しかありません。しかも委員会としては、検索実習の時間は確保してほしい、とのこと。すでに図書室に入れるだけでも少々無理がある人数ですが、準備期間がもう1日しかないので新しいことを考える余裕もなく、とにかくできるだけのことをやることにしました。10人座るとなると通常のパソコンのディスプレイは小さくて見えません。室内にスクリーンはあるのですが肝心のプロジェクタが借りられず、代替としてパワーポイントのスライド部分をA3用紙でプリントし、紙芝居のようなものを用意しました。会議室からこっそりホワイトボードを借用し、図を描いてフォローに使うことに。人数分の席が用意できないため、ホワイトボードとディスプレイが見えるような形でイスのみ並べて会場

設営。これがまた失敗でした。配布資料とディスプレイ、紙芝居とホワイトボード。説明するたび視線があちこちに飛んでしまうので受講者の混乱を招き、自分自身も大混乱という情けない顛末に。この人数ならやはりきちんと会場を用意するべきでした。

「やはり演習はやらない」ということで急遽20分延長してもらい、各自で検索。図書室には利用者用の端末が2台しかないため、管理用の端末も使って、医中誌 Web×2台、メディカルオンライン×1台で演習を行いました。それでも限られた時間の中で全員がさわることはできず、参加者も、あまり積極的でない人と、今のうちにとりあえず聞けるだけ聞いておこう、という積極的な感じの人と二分してしまいました。ほどなく時間となり流れ解散。委員会担当者からは「やはり時間が足りなかったので、来年どうするかちょっと検討します」とのこと。こちらでも申し訳ないほどの準備不足で、4年目にしての大失敗でした。

## 5. 5年目 (2009年)

「看護研究入門研修」と銘打ち、より基礎的な内容の研修へと変わりました。研修目的は「看護研究に必要な基礎的知識を理解する」、研修目標は「文献検索ができる」「文献を読み、クリティークができる」。目標に合わせ、研修内容は2本立てとなり、1コマ目は「文献検索とクリティーク」というテーマで看護研究委員の主任看護師が講義を行い、2コマ目に「文献検索の実際」というテーマで私が実施することになりました。

事前に参加者31名と聞き、演習はあらかじめ講義スタイルを初年度のような座学に。パワーポイントが必要になり、直前の3日間でほとんどの資料を新たに作り直しました。今回の参加者は年齢も経験年数もさまざま、大卒者もいると聞き、事前アンケートを実施。情報収集するためのツールにどの程度関心があるかを知るための項目を設定し、アンケートの結果に応じて説明内容を検討することにしました。アンケー

トの内容は ①図書室を利用したことがあるか ②図書室にどんな雑誌があるか知っているか ③図書室のOPACを使ったことがあるか ④医中誌 Webを使ったことがあるか ⑤メディカルオンラインを使ったことがあるか ⑥日本看護協会の「会員ダイレクト」に登録しているかの6項目。この結果から「会員ダイレクト」の登録の仕方やサービスについても説明を加えることにしました。

行動目標については ①一人で一通りの検索ができるようになる ②しほり込み、シソーラスの意味・見方、履歴検索の方法がわかる ③検索結果が多すぎ・少なすぎるときの対処方法がわかる ④クリップボードや印刷など、画面の操作がわかる ⑤検索結果の見方がわかる ⑥一次資料を手に入れる方法がわかる の6点で、この目標を満たせるような資料作成と説明を心がけました。

また、受講者にはもう1コマの講義「文献検索とクリティーク」のために課題文献が指定されており、事前に一読することが義務付けられていたため、その文献を利用して、医中誌 Webでどのように表示されるかを確認したり、関連文献を探すとしたら…と仮定してインタビューで連想するキーワードを聞き出したりしました。

実際の Web 画面とパワーポイントをいったりきりして、これもまた混乱を招いた様子。ほとんどの時間を実際の検索画面での操作説明に費やしたのですが、事後アンケートには「実際の画面を使って説明してほしい」との意見があり、区別がつきにくかったものと思われました。

また、他のデータベースとのリンクなど、医中誌 Web のサービス拡大や機能の充実により説明点が多くなり、合間にそれらの説明を織り交ぜたことで検索そのものの説明がぼやけてしまった感があり、それもまた混乱を招いた一因であると思われました。ついでに説明、ではなく、頭を切り替えるために別立てで説明したほうがメリハリがついてよかったかもしれません。

## 6. まとめ

最初は主に医中誌 Web の使い方が中心でしたが、医中誌 Web のサービス拡大に伴って説明点を増やしていったことで、結果的に「図書室でできること」をより多く知ってもらうことができました。また、大人数向けの座学形式と、少人数向けの演習形式の2パターンを経験してアウトラインができあがってきました。より具体的な行動目標など、基本方針もできあがってきました。

研修後の個別のフォローも重視するようになりました。看護師の理解度や知りたいことがわかり、反省や次への参考につなげるためです。研究テーマによってはヒットしにくいものもあるため、依頼に応じて代行検索も行うようになりました。

## V. 今後の課題

事後アンケートでは「実際に触ってみなければわからない」という声が多くありました。これまでの経験より、演習形式で実施したときは参加者の活気が違うため、できるなら演習形式で実施し、成功体験を得ることで、より手応えを感じてもらいたいと思います。しかし院内でインターネット端末を必要数準備することが難しく、そうなると個別のフォローがより重要になると思われます。

また、司書として検索技術やデータベースに関する知識については得意分野と言えますが、医学的・看護学的知識がなく、文献のテーマそのものについては全くの素人であるため、看護師から質問を受けても適切な回答ができないことも多々あります。代行検索を依頼されても、はじめて聞く用語だとまずそれを調べて理解するところから始めなければなりません。利用者の求めをよりよく理解するために、どのような自己学習をしていけばよいか、悩みどころです。利用者の求めを引き出すための、インタビュー技術の向上も重要なものだと思います。

看護師は自宅で JDream II を使用する人もい

ますが、当院では契約していないので私自身はお試し版での検索しか経験がありません。しかし、研修で「会員ダイレクト」など触れてしまっている以上、質問されて「わかりません」で済ませるわけにはいきません。現在は、サイトから無料のマニュアルをダウンロードして設置したり、関連記事を読んだりして対処していますが、ニーズに合わせた研修を行うためには司書の情報収集や自己学習が必要です。今年はぜひ JST の研修会に行ってみたいと思っています。

## VI. 最後に

看護研究とかわりを持たせていただいたきっかけは、ひとこと声をかけられたところからでした。病院図書館員としての経験がまだまだ浅く、正直なところ自信はなかったのですが、一人仕事ということと、看護部としてもはじめての試みということで、他と比較して評価されることもないわけで、ならばそれほど恐れることはないと思い、開き直って引き受けてしまいました。

成功の年も失敗の年もありましたが、毎年必ず同じと言えることは「講義が終わった後、参加した看護師さんたちとの距離がぐっと近くなる」ということで、これが研修の一番の成果だと思っています。複写依頼を受け、文献を集めて渡す。時に代行検索を行う。研究の工程の中で、図書室がかかわれるのはほんのわずかな一部分ですが、それでも院内研究発表までたどり着き、できあがった抄録やポスターによく知った名前を見つけると、自分も一緒に何かをやり遂げたような、何ともうれしい気持ちになります。

「図書館は成長する有機体である」との言葉がありますが、確かにこの5年だけでも当院の図書室は大きく変化し、徐々に機能的になってきました。また研修にかかわることで、毎年文献検索に関するツールを再確認することになり、自分自身もデータベースに対する理解を深めた

り、検索のテクニックを身につけたりするスキルアップにつながっていると思います。

これからも図書室、そして図書室を訪れる利用者とともに、私自身も成長していきたいと思っています。

謝辞

看護部と看護研究委員会の皆様、研修に参加しアンケートなどにご協力くださった看護師の皆様に感謝申し上げます。